

英語の授業における教材・教具の開発

—英語の授業を好きにさせるワークシート—

県立大和広陵高等学校 教諭 芳田 亮介

Yoshida Ryosuke

要 旨

言語活動を中心とした授業を展開することを目的としたワークシートを作成した。このワークシートを導入した授業を、2学期間を通して展開した結果、生徒へのアンケート調査において、特に英語の授業が嫌いであると回答していた生徒の理解度が高まった。

キーワード： ワークシート、学習意欲、言語活動、オールイングリッシュ

1 はじめに

本年度から高等学校において年次進行で実施されている新しい学習指導要領では、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能を使ったコミュニケーション能力を養うことが従来以上に重要視され、英語による言語活動の充実が求められている。しかしながら、実際の授業では、教員が授業をコントロールしやすい文法訳読形式の講義中心になりがちである。さらに、ペアワークやグループワークなど生徒の主体的な言語活動を導入することにも、生徒の授業に取り組もうとする姿勢が実に多様であるので、ともすれば生徒の人間関係を崩してしまう心配もあり、二の足を踏んでしまう現状があるようである。筆者自身も、英語を用いたゲームや歌などの楽しむことをねらった活動を取り入れることはあるものの、教科書の内容理解をより深めるような知的な活動を取り入れ、英語を学ぶ楽しさやおもしろさを生徒に味わわせるところまでには至っていないと反省することも多い。

そこで、本研究では、本校の生徒の実態を把握した上で、学習指導要領に掲げられているオールイングリッシュの授業を目指し、英語の学習に対する関心が低く、授業に対する積極性も乏しい生徒の積極的な授業参加を促すために、英語による言語活動の充実した授業を展開するための効果的なワークシートの開発に取り組むことにした。

2 研究目的

英語の学習に対する関心が低く、授業に対する積極性も乏しい生徒の積極的な授業参加を促すために、英語による言語活動の充実した授業を展開するための効果的なワークシートを開発し、その効果を検証する。

3 研究方法

- (1) 先行研究の調査
- (2) 事前アンケートの実施（6月）・・・生徒の実態把握
- (3) ワークシート作成、及び授業実践（2学期）
- (4) 事後アンケートの実施（11月）・・・生徒の変容の分析及び考察

4 研究内容

(1) 先行研究の調査

本研究を進めるにあたり、先行研究の調査結果を踏まえ、ア 『長続きする「楽しさ」の視点』、イ 『言語理論の視点』、ウ 『図や絵などを取り入れる視点』、エ 『音読の視点』の四つの視点を参考にした。

ア 長続きする「楽しさ」の視点

長続きする「楽しさ」について、斎藤（1996）は、長続きする「楽しさ」については、「少なくとも次の二つの条件があるように思えます。(1) 自分が、問題を解決するための具体的な活動をおこす主体的な参加者であること。(2) その中で、自分自身の判断力を発揮できる場があるということ。英語の授業の場合も、表面的な楽しさだけでずっと続けられるとは思えません。」と述べている。斎藤（1996）が言うように、英語の授業の本来の楽しさは、表面的なものでなく、知的かつ主体的な活動を通して伝えられるべきものであると考える。そこで、この視点を重要なポイントとした。

イ 言語理論の視点

教材を考える際に、アイデアや直感だけに頼らず、言語理論も踏まえて指導計画を作成する必要があることは言うまでもない。そこで、斎藤（1996）が示している、「①授業をできるだけ英語で通す。comprehensible input を多量に与えるためには、できるだけ授業を英語で通すことが必要となる。②多量の comprehensible reading を与える。そして、英文をいちいち訳さない。③structure や rule（文法）をあまり重視しない。かたちよりは伝えられる message の内容を重視する。message が伝わればよしとする態度でいく。④英語学習の中で、思考活動をさせる授業の方向を探る。文型中心の授業は、ある面からいえば、思考活動停止の授業である。⑤自己表現の活動を多くする。」の5点を参考にした。

中でも、①はオールイングリッシュを目指す第一歩となり、新学習指導要領のもとでは重要視すべきである。斎藤は続けて①について、「聞く」、「話す」活動における音声指導は、「読む」、「書く」の文字を通しての指導の土台となると言い、音声指導をする際に教員がもつ心構えについて、4点示している。

- a 教師が、生徒にわかるやさしい英語で話し続けること。
- b 教師が、英語による多数の質問を、生徒に浴びせること。
- c それに対して、生徒からは yes, no だけの short answer でもよいから反応をひきだすこと。メッセージが伝わったかどうかの確認ができればよい。
- d どこかに、必ず、英語による生徒の自己表現の場を準備すること。

以上、斎藤（1996）が示す具体的な教員の心構えを念頭に置き、ワークシートを作成する

こととした。

ウ 図や絵などを取り入れる視点

第3の視点として、伊東（2008）が取り上げている、「構造マップ」を活用する。構造マップは、「理解や学習を高めることを目的とし、ある与えられた領域において、構造的知識を示すために、図や図形、チャートなどを使い視覚的な構造にすること」と定義されている。伊東（2008）は、「複雑な文になるにつれ、文全体に何が書かれてあるか分かりにくくなります。この構造マップを使えば、筆者の核となるメッセージを伝えるために筆者がどのような文展開を使っているか、また文全体に何が書かれているかという点の把握に役立ちます。」と述べ、さらに、「マッピングを使うことにより、文と文、段落と段落の関係が認識でき、キーワードが絞られ、テキスト全体の流れを把握するメリットがあります。また、従来リーディングの時間は内容そのものが扱われず、文法解説のための英文読解であることが多く、それにとまって、文法に関する説明だけが板書されていることが多かったのですが、構造マップを使うと、内容のキーワードや流れが板書されます。よって生徒たちもテキストの内容そのものを学習しているという認識がもてます。」と言う。文章全体の流れを構造的にとらえることができるという点で、この「構造マッピング」が生徒の英文理解に有効であると考えた。

また、視覚的な補助として、絵の活用もする。斎藤（1996）は、絵の効果について、「①場面を与えることができるから状況が一目瞭然に理解できる。（中略）⑧学習の速い生徒のみならず、遅い生徒の興味を引きつけることができる。このことはかなり重要である。slow learner を授業に引きつけるには、まず絵を使うというのは初歩の段階でかなり効果を発揮する。」と述べている。このように、英文の内容理解を深めるために、絵を効果的にワークシートに取り入れていけば、英語の授業に対する関心が低い生徒にも分かりやすく、有効に作用するのではないかと考えた。

以上の視点から、ワークシートには図や絵などを用い視覚的に内容理解が深まるよう工夫することとした。

エ 音読の視点

四つ目に、音読指導をする際に有効な視点を参考にした。鈴木・門田（2012）は、音読指導がなぜ必要かについて、人が文章を黙読して理解する過程に着目して説明している。単語の認知は、①眼球による文字知覚、②その文字の塊（単語）を長期記憶内のスペリング情報の中から検索・照合、③それを頭の中での音読、④その単語の意味を想起、という順で行われる。それに続いて、統語、意味、スキーマ、談話などの処理が行われて文章の意味を理解することになるのだが、文章理解にはこれらの処理が高速に行われることが不可欠で、それを可能にするのが音読であるとしている。音読によって、スペリングと発音の結びつきを強化するとともに、学習した語彙や、文法などを内在化できるからである。その結果、文章理解のための処理が高速化し、文章理解力と発表能力の基礎ができあがる。このような理由で、音読は、外国語としての英語学習に必要な不可欠であるのだという。ただし、かなりの時間を音読指導に当てたとしても、その目的が不明確な授業や、授業の中での位置付けや、用いられている音読指導法が不適切であれば、音読指導の効果は半減するとも述べている。後述の事前アンケート調査結果からもわかったように、英語の授業が「好き」、「どちらでもない」、

「嫌い」と回答したいずれの群においても音読は好印象であるので、上記の音読の視点を基に、有効な音読指導を工夫し、ワークシートに音読用のコーナーを設けることとした。

(2) 事前アンケート調査による生徒の実態把握

ア 事前アンケート調査の実施

生徒の事態を数値で把握するとともに、検証の方向性を定めるために、筆者が、「英語Ⅱ」を担当している2年生59名の生徒に対して、英語の授業についてのアンケートを実施し、当日の欠席者を除いた54名の有効回答を得た（資料1参照）。

イ 事前アンケート調査結果の分析

「1学期に使用していた『まとめプリント』が好き」と回答した生徒の割合は1割に満たなかった。「音読活動が好き」と回答した生徒が4割を超え、他の活動と比較して最も高かった。これらの結果を踏まえ、ワークシートを作成することにした。

さらに、英語に対する学習意欲によって生徒の変容が異なるであろうと考えられるため、英語について「好き群」「どちらでもない群」「嫌い群」3群に分け、それぞれの群の変容を見ていくことにした。具体的には、「英語の授業は好きですか？」という設問に対して、「好き」あるいは「どちらかというが好き」と回答した20名を「好き群」、「どちらでもない」と回答した22名を「どちらでもない群」、「どちらかという嫌い」あるいは「嫌い」と回答した12名を「嫌い群」とした。

(3) ワークシート作成及び授業実践

ア ワークシートの作成について

先行研究及び事前アンケート調査結果の分析を参考に、以下の8点に留意してワークシートを作成した。

- ① ワークシートは毎時間完結するよう分量を調整し、生徒の混乱を避けるため、一定パターンで展開できるようにする。
- ② 新出語句をワークシートの1ページ目に意味及び発音と共に提示し、生徒が内容を理解する上での助けとなるようにする。
- ③ 音読用に、チャンクに区切った本文を提示し、難解な構文及び新出語句の下には日本語を書き入れるスペースを設ける。全訳は書き入れさせない。
- ④ 数回に分けて音読した後、構造マッピングの手法を用い、本文の要点をつかませる。また、図や絵などを用い視覚的に内容理解が深まるよう工夫する。
- ⑤ 本文の内容を振り返り、内容理解を更に深めるために、英語要約文の空所補充問題を設ける。
- ⑥ 内容理解を深めるため、本文の要約を日本語で書き入れるスペースを設ける。
- ⑦ 本文の内容について、自身の考えを英語あるいは日本語で書き入れるスペースを設ける。
- ⑧ できる限り英語で授業を実施するために、指示が生徒に確実に伝わるよう、ワークシート上では日本語で指示を与える。

イ ワークシートを用いた授業実践

『VISTA English Series II New Edition』（三省堂出版）のLesson11（p.82～p.87）、Lesson12（p.88～p.93）について、別掲のようなワークシートを作成し、授業を行った。授

業はワークシート記載内容の順に2学期に展開した。Lesson11については6時間、Lesson12については8時間の展開となった。

(4) 事後アンケート調査から見える生徒の変化

事前アンケート調査と同様に、授業実践後に、アンケート調査を実施した。各質問項目について統計処理を行うために、それぞれの回答について得点化を行った。5件法で尋ねた項目については肯定的な回答から順に5点、4点、3点、2点、1点とし、4件法で尋ねた項目については同様に4点、3点、2点、1点とし、得点化を行った。分析には、IBM社のSPSS21を用いた(参考資料2参照)。

ア 事後アンケート調査結果の分析

(7) 「英語の授業は好きですか」の設問について

「英語の授業は好きですか」という設問に対する事前アンケート調査と事後アンケート調査の平均値間に有意な差があるか、対応のあるt検定を行ったところ、「嫌い群」の生徒において0.1%水準で有意差がみられ、ワークシートを用いた授業実践後の方が平均値は高かった(表1参照)。

表1 事前・事後アンケート分析結果3群比較

	事前アンケート		事後アンケート		t 値	N	有意確率(両側)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
「好き群」	4.250	0.444	3.750	1.209	-1.751	20	0.096
「どちらでもない群」	3.000	0.000	3.000	1.155	0.000	22	1.000
「嫌い群」	1.500	0.522	3.333	1.073	4.750	12	0.001 ***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

(4) 「今の英語の授業をどの程度理解していますか」の設問について

「今の英語の授業をどの程度理解していますか」という設問に対する事前アンケートと事後アンケートの平均値間に有意な差があるか対応のあるt検定を行ったところ、「嫌い群」の生徒において0.1%水準で有意差がみられ、ワークシートを用いた授業実践後の方が平均値は高かった(表2参照)。

表2 事前・事後アンケート分析結果3群比較

	事前アンケート		事後アンケート		t 値	N	有意確率(両側)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
「好き群」	3.350	1.137	3.250	1.251	-0.233	20	0.818
「どちらでもない群」	2.727	1.162	2.773	0.973	0.119	22	0.906
「嫌い群」	1.667	0.778	3.167	1.073	7.707	12	0.000 ***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

(ウ) 「2学期に使用したプリントの中で、授業の内容を理解するのに役に立ったと思うものは何ですか」の設問について

図1、図2は、それぞれ、事後アンケート調査の「2学期に使用したプリントの中で、授業の内容を理解するのに役に立ったと思うものは何ですか」及び「2学期に使用したプリントの中で、授業の役に立たなかったものは何ですか」という設問に対する回答結果である。

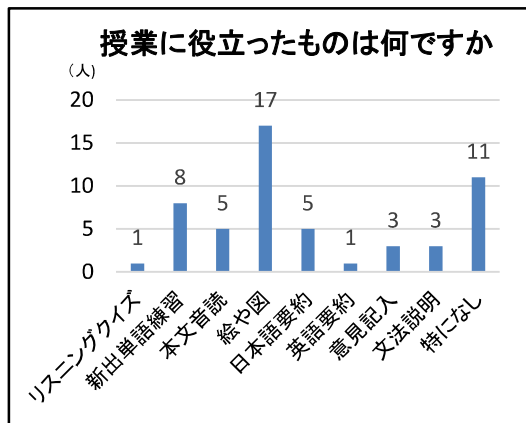


図1 事後アンケート (全体)

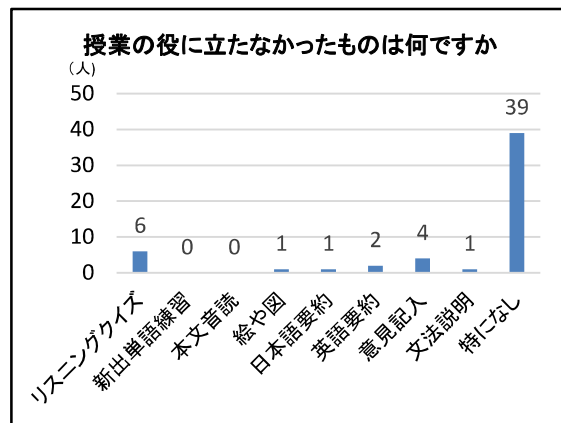


図2 事後アンケート (全体)

図1を見ると、導入したワークシートの中で、「絵や図」が役立ったと回答している生徒が相対的に多いことが見て取れる。また、図2から、各項目において授業の役に立たなかったという回答の合計よりも、授業の役に立たなかったものは「特になし」と回答した生徒数の方が多かった。

イ 生徒の記述回答に関する分析

(7) 「1学期と比べて2学期の方が積極的に授業に取り組めたか」の設問について

「1学期と比べて2学期の方が積極的に授業に取り組めましたか」という設問に対する回答は図3の通りである。6割以上の生徒が「そう思う」、「まあまあそう思う」と前向きな回答をしている。その理由として、以下のような記述回答があった。

- ・1つ1つに無駄がなく、授業がスムーズに進行したから。
- ・先生が英語で話しているので、集中し、積極的に取り組めた。
- ・絶対聞いておかないとプリントが書けなくなっていて、頑張れるようになった。
- ・今のプリントの方がわかりやすく楽しい。
- ・発言をいっぱいできた。
- ・自分の意見を言えるところ。

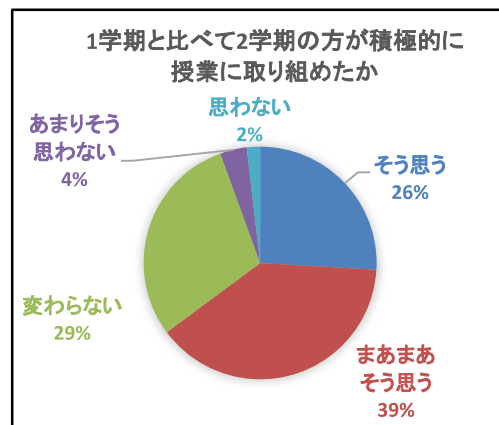


図3 事後アンケート (全体)

これらのことから、1学期と比べて2学期の方が比較的、積極的に授業に取り組めたことがわかる。

(イ) 「2学期のワークシートの方が勉強しやすかったか」の設問について

「2学期のワークシートの方が勉強しやすかったですか」という設問に対する回答は図4

の通りである。約6割の生徒が「そう思う」、「まあまあそう思う」前向きな回答をしている。その理由として、次のような記述回答があった。

- ・内容を深くできて、自分で考える時間が増えてよかった。
 - ・英会話が入っているのでリスニングができる。また、授業に参加しないとワークシートが埋まらないので生徒のためになる。
 - ・一つ一つの単語の発音などがわかりやすくなったから。
 - ・見やすく、わかりやすく、勉強しやすいため。
 - ・ワークシートが順序良く進んでくれるので理解しやすい。
 - ・自分で思ったことを考えて書くことが良かった。
- これらのことから、1学期のワークシートよりも2学期に導入したワークシートの方が、生徒にとっては学習に取り組みやすかったということがわかる。

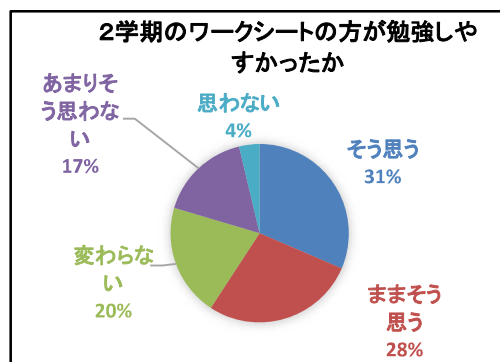


図4 事後アンケート（全体）

(ウ) 「英語で授業をすることに対する感想」の設問について

英語で授業をすることに対する感想を生徒に求めたところ、以下のような記述回答があった。

- ・これからは英語が大事になるので、とてもためになる授業だと思っています。
- ・わからない単語がまだまだたくさんあり、言っていることがわからない時もありますが、とても楽しいです。
- ・嫌でも耳に英語が入ってきて、自然と聞いていた。
- ・わかると楽しいからいいと思う。

このように、2学期に導入したワークシートについて肯定的な感想が多かった。

5 考察

ア ワークシートの工夫による効果

表1のアンケート結果から、英語の授業が嫌いな生徒が、本研究で作成したワークシートを通して、ワークシート使用前よりも、英語の授業に好感をもつようになったといえる。加えて、表2のアンケート結果から、英語の授業が嫌いな生徒の授業の理解度が高まったといえる。斎藤（1984）は、生徒の英語学習のやる気をなくさせている大きな原因として、「英語がわからないから」を挙げているが、本研究で作成したワークシートによって、とりわけ英語の授業が嫌いな生徒が授業の理解を深め、その結果、英語の授業に対して前向きな姿勢を示すようになったという点で、一定の効果があったといえるのではないかと考える。その理由の一つは、図1から、ワークシートに「絵や図」を加えたことが、生徒の理解を深めたからではないかと考えられる。また、そうした工夫が生徒の理解を促したことで、教員の英語使用が増えても大きな混乱を起こすことなく、より高い理解度へとつながったのではないかと考える。さらに、図2から、「絵や図」のみが効果的であったのではなく、生徒が、授業の役に立たな

かった活動はほとんどないと感じていることが読み取れるので、ワークシートに導入したどの部分も一定の効果があったのではないかと考える。教員の英語使用を増やし、生徒が英語に触れる時間を増やし、より効果的な英語の授業を展開していく上で、筆者が担当する生徒において、このワークシートは有効に働いたようである。

イ 英語使用を増やした効用

生徒の記述回答より、教員が英語の使用を増やしたことで、「聞く」ことに積極的な姿勢をもち、授業全体が活性化したことが読み取れる。1学期までの文構造に焦点を当てていた授業方法ではなかなか出てこなかった、前述の「生徒の記述回答」で挙げたような意見が出されるようになり、より積極的な姿勢が見られた。また、ワークシートに図や絵を用い、ワークシート内の指示を日本語で行うなどの工夫をしたことで、教員が英語で授業を進めても理解できるようになったという意見も多く見られ、英語が苦手な生徒が授業の理解を深めるための補助となるワークシートとなったのではないかと考える。

授業中の生徒の反応や様子を観察してみると、教員が英語の使用を増やすことで危惧していた「生徒は教員が何を言っているのかわからなくなり、授業に対して消極的になってしまうのではないか」という心配は杞憂に終わった。「発言がいっぱいできた」と記述した生徒をはじめ、1学期までは授業に消極的だった生徒が、2学期では教員の英語を聞いて、その内容に対して日本語ではあるが積極的に意見を述べていた姿が非常に印象に残っている。教員の英語に対して生徒も英語で返答し、会話していくことがより重要なことではあるが、第一歩として、授業に積極的に取り組める授業を行うという点で、生徒によい影響を与えることができたのではないかと考える。

6 今後の課題

図5は、「1時間のうちどのくらい英語に触れていると感じますか」という質問に対する生徒の回答をまとめたものであるが、教員が抱く感覚と近いのではないだろうか。オールイングリッシュの授業を成立させるためには、まず教員自身の英語使用量を増やすことが大切である。今回ワークシートの活用を通して、授業者の英語使用量が増えたことを実感したが、更なる方法を考える必要がある。

また、斎藤（1996）が、『話す』という力は話してみなければ伸びない、『書く』という力は書いてみなければ伸びない、『読む』という力は読んでみなければ伸びない、『聞く』という力は聞いてみなければ伸びない」と述べ、田尻（2009）が、「英語力を上げようと思ったら、たっぷりとドリルをした後、覚えた英語を生徒たち自身にたっぷり使わせてあげないといけない」と述べているように、生徒の英語によるアウトプットの機会を増やしていくことも重要であろう。「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能をバランスよく取り入れた授業づくりも検討課題である。

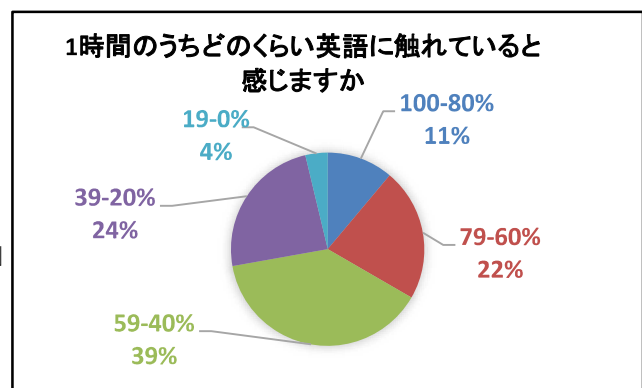


図5 事後アンケート調査結果（全体）

7 おわりに

本研究は、自分の授業実践を見直すよい機会となった。英語使用量を増やすことが生徒とのコミュニケーションを増やすことにつながることで、ワークシートを用いることは生徒の実態把握にも有効であること等、様々な発見があった。実際、生徒との英語を通してのコミュニケーションが増えたことで、生徒の表情や授業の雰囲気は明るくなったように感じる。また、自分の発問力を高めること、ペアワークやグループワークも取り入れた3年間のシラバスを検討する必要があること等、今後の課題も明らかになった。これを機に更なる授業改善を進め実践的指導力を高めていきたい。

参考・引用文献

- (1) 齋藤栄二 (1996) 『英語授業レベルアップの基礎』 大修館
- (2) 伊東治己 (2008) 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版
- (3) 鈴木寿一・門田修平 (2012) 『英語音読指導ハンドブック』 大修館
- (4) 齋藤栄二・鈴木寿一 (2000) 『より良い英語授業を目指して』 大修館
- (5) 齋藤栄二 (1984) 『英語を好きにさせる授業』 大修館
- (6) 田尻悟郎 (2009) 『(英語) 授業改革論』 教育出版
- (7) 田尻悟郎 (2010) 『生徒の心に火をつける』 教育出版
- (8) 田中武夫・田中知聡 (2009) 『英語教員のための発問テクニック』 大修館